

第VI章　ま　　と　　め

1 磔組井戸について

北陸地方の2001年までの中世井戸については、北陸中世考古学研究会が集成している〔北陸中世考古学研究会編2001〕。北陸の傾向を確認しながら、越後はその後の成果を含め、本遺跡に特徴的な礎組井戸について考察する。

越前・若狭では13～14世紀は素掘りの井戸で、曲物使用が多く、14～15世紀も素掘りが大半で16世紀に入って石組井戸が出現し、一乗谷遺跡はすべてが石組となる。白山平泉寺旧境内遺跡では素掘り・石組半々となり、都市部は石組、農村は素掘りの見通しを持っている。

加賀では石組井戸は11世紀中葉～12世紀後半、13世紀からあるが、ほとんどが14世紀であり、切石を使用した井戸が白江梯川遺跡、永町ガマノマリ遺跡で数基認められる。

能登では、石組井戸が8世紀代の中美麻奈比古神社前遺跡で検出されているのが最も古く、14世紀前半に寺家遺跡で検出され、14世紀後半から増加する。礎が付近に豊富にあるところでは石側を採用しているとしている。

越中では、12世紀後半～15世紀が木側、石組は14世紀に出現し、15世紀から井戸の主体となり18・19世紀まで続く。粘質土系台地は素掘り、沖積地は木・石組を採用しているとしている。

越後以西での石組井戸の出現時期、盛行の時期は多少の違いがあり地域色が出てるようである。

越後では、越中と傾向が似ており礎組井戸が採用されるのは14世紀代で、城館や有力集落に広がるのは15世紀代である。切石組は無く礎組のみで下越に多い特徴がある。これは、下越で館の発掘調査例が多く、上・中越で少ないことが理由と考えられる。

第3表は越後の礎組井戸を集成したものである。遺跡数は13¹⁾、井戸数は38基、上越では4遺跡8基、中越は3遺跡5基、下越は6遺跡25基である。圧倒的に下越が多いが、胎内市江上館跡〔水澤1997〕、下町・坊城遺跡〔水澤1999・2005〕で19基を占めるのが特徴的である。全体的に集落より城館跡や寺院などでの検出が多く、国人層などに広がった井戸の築造方法と考えられる。特に阿賀北衆と呼ばれた人々が割拠した阿賀野川以北の地域に多い。糸魚川市の山岸遺跡〔春日ほか2012〕は鎌倉時代の越後守護名越氏関連の集落であるが、越後での礎組井戸の最も古い例となる可能性がある。本遺跡の井戸では、SE9の礎組井戸が珠洲Ⅲ～Ⅳ期（13世紀後半～14世紀中葉）と越後での出現期に近い可能性がある。SE22の礎組井戸は陶磁器類の出土が無いが、越後では水溜めに結桶が使用されるのは15世紀後半以降とされるので、SE22はほかの遺跡と同様15世紀後半以降の可能性が高い。

井戸の歴史的展開とその背景について鐘方正樹氏〔鐘方2003〕は、石組井戸は日本では7世紀前半ごろに出現する。その後、8世紀初頭までは飛鳥地方などで少量確認できるが、8世紀前半（奈良時代）～12世紀後半（平安時代末）までの間はほとんどなくなる。12世紀後半になって平安京で石組井戸が急速に普及し始めるのは、保元・平治の乱（1156・1159年）での社会の混乱、1177・1178年の平安京始まつ

1) 上越市至徳寺遺跡で中世後期の石組井戸が検出されているようだが、未報告のため含めていない。

1 槻組井戸について

遺跡名(所在地)	遺跡・遺構の時期	遺跡の性格	立地	地山の質	I : 槻のみ A : 6段以下、B : 1m前後以上 SE9・A 磁3段	II : 槻(A・B) + 引構造(1~3) 1 : 橋棟 2 : 曲物 SE648 : B 磁12段100cm、木觸痕	III : 槓桶 3 : 純桶 SE22 : A	備考	文献
狐屋敷跡(村上市)	14C後~15C	集落	冲積地	砂礫				小河氏関連	
古渡路遺跡(村上市)	13C後~15C中	集落	冲積地	砂礫		SE090 : B20段190cm SE45古:A			『新潟県埋蔵文化財報告書第221集』2011 本報告。
西部遺跡(村上市)	13C後~15C後	寺院	冲積地	砂					『新潟県埋蔵文化財報告書第148集』2005
長松遺跡(村上市)	15C	城館跡	冲積地	一					『津林村埋蔵文化財報告書第3』1991
江上館(胎内市)	15C後				一 井戸902 : B 磁11段 一 井戸937 : A 磁中央5.6段				『江上館跡V』中条町1997
	12~16C				一 井戸17 : A 磁6段80cm	井戸18 : 20段歟210cm		D 地点	
	16C中~				一	井戸120 : B		D 地点	
	15C				一	井戸232 : A 磁5.6段		D 地点	
					一	井戸334 : B 磁20段140cm		D 地点	
	15C末				一		井戸411 : B 磁90cm結桶2段	A 地点	
下町・坊城遺跡(胎内市)	15C~第Ⅲ四半期	屋敷地	冲積地	一		井戸494 : 磁190cm		A 地点	
	15C後				一	井戸478 : A 磁4段		A 地点	『下町・坊城遺跡II』中条町1999
	15C~第Ⅲ四半期				一	井戸496 : A 磁3~5段		A 地点	『下町・坊城遺跡VI』中条町2005
					一		井戸509	A 地点	
					一	井戸626 : B		A 地点	
					一	井戸768 : A 磁1~2段		A 地点	
	15C前				一	井戸769 : B 磁180cm		A 地点	
	~15C前				一	井戸778 : A 磁5.6段		A 地点	
					一	井戸779 : B 磁120cm		A 地点	
					一	井戸802 : B 磁110cm		A 地点	
					一	井戸824 : A		A 地点	
余川中道遺跡(南魚沼市)	14~16C	集落	冲積地	一	SE74 : B 磁100cm 一 基未報告				『新潟県埋蔵文化財報告書第139集』2005 明治期遅遺構
御飯遺跡(南魚沼市)	中世	城館跡	冲積地	一	SK3:A				『新潟県埋蔵文化財報告書第139集』2005 明治期遅遺構
伊達八幡館跡(十日町市)	15C前~16C前	城館跡	段丘	砂礫	井戸1 : B 磁90cm 井戸2 : B 磁90cm				『十日町市埋蔵文化財報告書第26集』2005
仲田遺跡(上越市)	15C	集落	冲積地	砂	シルト SE219 : A 磁3段 SE247 : B 磁180cm				
春日山城(上越市)	16C	山城	山城	一	SE6				
高畠遺跡(上越市)	中世	集落	冲積地	一	SE15				
山岸遺跡(糸魚川市)	13~14C	集落	冲積地	一	SE22 : B 磁100cm SE1324 : B 磁7段80cm SE3845 : B 磁70cm SE3846 : B 磁75cm			名越氏関連	『新潟県埋蔵文化財報告書第42集』1986 『新潟県埋蔵文化財報告書第228集』2012

第3表 越後の櫻組井戸一覧

て以来の大火によって、井戸枠に転用する建築資材が失われ、木材の大量需要が発生したことで価格の高騰が考えられる。このため、近辺で容易に採取できる石を利用して石組井戸が作られるようになり、逆に、大火や戦乱を免れた地方では木製の井戸枠が使用され続けた。井戸枠の構造が木組みから石組へと変化していく現象は地方でも認められているが、その分布は有力者の居住域周辺に偏在する傾向がある。これは、京都を中心に盛行しつつあった石組井戸が外見的に都市型井戸様式として転化するような状況が生じ、それを意図的に模倣することによって起こったとする。

室町幕府発足後、1341年に足利幕府の重臣である上杉憲顕が越後守護職となり、以後代々上杉氏が守護となる。上杉氏の越後の支配が進むにつれ、国人たちとの関係も強化され、しだいに越後国中に京都の文化も流入したと考えられる。越後の国人には「在京役」なる軍役が課され、守護上杉氏のもとで京都の警備に当ることになっていた〔山田 1987〕。在京中に見た都の石組井戸がそれぞれの館で再現され、所領の中でも「村殿」といわれた村落領主の間にも採用されたのではないだろうか。

2 陶磁器から見た遺跡の消長

本遺跡からは中国からの輸入陶磁器と国産の土器・陶磁器が出土している。これらの出土遺物から遺跡の消長を考察する。輸入・国産陶磁器の時期を第4表に示した。国産陶磁器は、わずかではあるが平安時代の須恵器・土師器が出土していることから、9世紀後半～10世紀初頭ころから周辺での人々の活動が知られる。その後、中世の12世紀末までは人の動きは無く、本遺跡が再び動きを見せるのは13世紀初頭である。出土遺物が増えるのは14世紀後半～15世紀代である。このころに小河村も最盛期を迎える小河氏も「村殿」（村落領主）として本庄氏の支配下にあったと考えられる。資料に小河氏の名が初めて見えるのは1481年のことである（第5表）。ただ、隸属的な支配関係ではなかった両者の関係が変化するのが、本庄長資が小河弾正左衛門長広の養子に入った時期（年不詳）と考えられる。小河氏を家臣とするため養子に出した長資は、天文8（1539）年に本家の本庄氏に対し謀反を起こし、同20（1551）年に耕雲寺において甥の本庄繁長に切腹させられる。その後小河氏は鮎川氏に帰属する。鮎川氏の居城があった大場沢から東の石住へ至る道沿いに100m余にわたり十三塚があった。これは切腹した小河長資以下、13人の死者を葬った場所と伝えるが現存しない〔大場ほか 1986〕。小河村は一時期荒廃し、のちに本庄氏の家臣である石栗将監が入ったとされるが〔田中・大場 1999〕、具体的な年次は不明である。小河村の重要性を考えると、そう間を置かないとも考えられる。石栗氏は旧小河氏の館があったとされる場所には入らず、周囲に集住したと見られる。慶長2（1597）年の「瀬波郡絵図」（第6図）には「小河村 鮎川・大国但馬分 中（地味） 本納 合百六十九石六斗七升五合 繩ノ高 三百四十六石八斗八升九合 家合十三間」と書かれ、数件描かれる屋敷は石栗氏が中心と考えられる。小河氏の館のあったとされる地には、元和元（1615）年には旧朝日村の寺尾から金源寺が移築された。近世の17世紀後半～18世紀中葉の時期の遺物が欠けているが、調査区が狭小なことと関連すると考えている。その後は幕末～現代までの遺物が

種別	9世紀	10世紀	11世紀	12世紀	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀	17世紀	18世紀
輸入陶磁器						■	■			
国産陶磁器	■	■			■	■	■	■	■	■

第4表 陶磁器から見た遺跡の消長